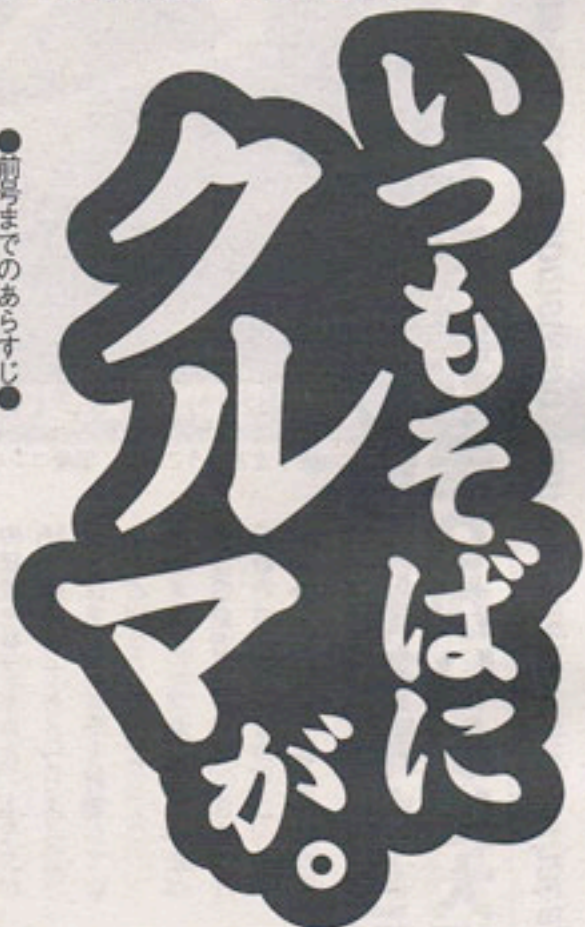


コラム連載100回記念[後編]

コラム連載100回目となった先月号では、第1回目の「僕が走り続ける理由」をテーマに、これまでこのコラムを続けていく中で感じたことや、改めて自分がどんな人間なのかについて振り返ってみた。今回は続編として、これからのジャーナリストはどうあるべきか、そして未来になにを見据えているのかを書いてみたい。

■文：太田哲也



浦

●前号までのあらすじ●
島太郎状態から抜け出して社会復帰を果たし、モータージャーナリスト業界で、はつきりモノを言っても許されるアウトロー的な地位を得た太田が、今、何を考え、どんな活動をして、そして未来に何を見ているのかを今回でお伝えしたい。

本当のことを言わないと日本車は良くならない!

僕は常々思っているんだけど、自動車業界の発展にとつて大事なことは、批判精神を忘れないことだろう。良いことばかり言っていたらメーカーの広報担当者も喜ぶだろうけど、でも本当のことを言わなかったら自動車メーカーは良くなっていかない。最近の欧州車との比較でなぜ日本車の能力が落ちてきてしまっ

たかというところ、批判がなくなっってしまったからだ。人間も組織も歳をとると批判を受け入れるのが嫌になってくる。でもそれでは進歩が止まってしまふ。

ユーザーも、批評されているクルマを短絡的に「ダメ車」と思わないでほしい。人もクルマも本当にダメということはあまりなく、ただ個性が違う。短所は長所の裏返し。

浦島太郎としてクルマと接してきたわかったのは、クルマは結局、どこを重視してどこを捨てるか。そこに個性が生まれ、存在価値がある。悪いところなし、全部OK!なんてありえない。あったとしてもそれでは凡庸になってしまふ。

もちろん過去には、ダメ車が存在した。でも今は致命的な故

障はしない。捨てたことで得られた価値が、ユーザーにどれだけ夢を与え、幸福にできるかだろう。

自動車評論家以外にもいろんな活動してます

僕が自動車評論家あるいはレジャーだと思っている人が多いだろうが、それ以外の側面もあるんだ。すでにご存じの人もいるだろうが、40歳からのレース出場を目指す「太田哲也とオヤジレーサーズ(正式名称TEZZO RACERS CLUB)」

の主宰。40歳は初老の始まり、人生の着地点が見えてきて新しいチャレンジはもう無理と思う頃。でも本当はいくつかからでもチャレンジはできるのだ。できないのは失敗や恥を恐れるから。失敗や恥を厭わないで格好良い大人を目指そう、子どもの世代に夢を与えようという趣旨だ。

またホリデーオートとも連動した「TeetsuyaOtaエンジンヨイ&セーフティ・ドライビングレッスンwith出光」はサーキットで初心者から愛車の性能を知ってもらって公道での安全運転につなげてもらう趣旨だ。様々なメーカーに協賛してもらい年に数回ほど行っている。

さらに朝日小学生新聞と出光と合同で「太田哲也小中学校出

張授業」も行っている。これは僕が主宰する「NPO法人KEEP ON RACING」とも連動した活動で、チャレンジの大切さやクルマの楽しさを伝える講演を行う。NPOでは昨年は東日本大震災復興支援活動も行った。

さらにフェラーリやアルファロメオをベースにしたチューニングブランド「TEZZO」と、シヨールーム&サービスファクトリー「TEZZO BASE」の経営もしている。

これはリーマンショックの際、これから自動車評論家は大変な時期を迎えるから別の仕事も持った方が良くという気持ちで始めた。なんでまたこんな不況下に...と同業者には不思議がられながらのスタートだった。

それまで慣れ親しんだ渋谷区代々木の事務所を引き払い、土地勘のない横浜市都筑区に来たわけだが、これも3年が経ち、最初はスタッフふたりだったが、今ではアルバイトを含めて12人ほどに増えた。

僕は仕事人として一番大切なのはモチベーションだと考えている。だからやる気のある人材は積極的に採用してきた。何か特技があつてやる気があるなら、彼(彼女)ができる仕事は何かないかと考える。今後もどんど



▲マーケティング主導の便利なクルマばかりを作っているのは、クルマは単なる道具としてみなされ、逆にクルマ離れを招くことにもなりかねない。86のようなカッコ良くて手頃なスポーツカーを出すことで、クルマの存在価値は上がるのかもしれない(写真は2011東京モーターショーの86ブース)

同時に人間開き直れば結構できるもんだよという証明になって、今、不幸のどん底にいる人たちが少しでも勇気づけられることができた嬉しい。

僕の考えは、常識は過去の積み重ねに過ぎず、進歩には常識を疑うことも大事。時には周囲の

声よりも自分の目を信じ、時代の空気を先読みしてチャンスだと思つたら、すぐに始めること。細かいことはやりながら考える。そしてそれが社会に良いことなら、社会がきつと放つて置かないはずだと考えている。

僕では最後にあれから10年、僕のクルマの未来への思いを伝えよう。まず浦島太郎を驚かせたミニバンやマーケティング主導のクルマたちが、今では色褪せてきたようだ。

マーケティング主導では感動が薄いのだろう。そもそもクルマには夢が大切だと思う。夢って何だ、と言つたら定義は人それぞれだろうけど、少なくとも今の自分と等身大ではないはず。ドンピシャは夢じゃないよね。

マーケティング主導で家族構成とか年収とか生活スタイルとかをメーカーの人間から当てはめられ、あなたにピッタリなのはこれです、とやられて夢はあ

ん受け入れていくつもりだ。やる気があって、でも給料は最初は安くてもいい人、来たれ！予想に反して、原稿の依頼も減るでもなくむしろ増えて現月に連載8本、講演の仕事も企業からも依頼され、つまり仕事の量は膨大となった。

ばかりではない。休みがなくて女房との喧嘩が増えたのだ。それで10年したら仕事をやめると約束させられた。残りあと7年は頑張るつもりだ。

それにしても、あの病院の屋上で「死ぬことすら許してもらえないのか」と深い絶望に遭った男が、ここまで来られたのは本当に多くの人たちのおかげだ。

声よりも自分の目を信じ、時代の空気を先読みしてチャンスだと思つたら、すぐに始めること。細かいことはやりながら考える。そしてそれが社会に良いことなら、社会がきつと放つて置かないはずだと考えている。

僕では最後にあれから10年、僕のクルマの未来への思いを伝えよう。まず浦島太郎を驚かせたミニバンやマーケティング主導のクルマたちが、今では色褪せてきたようだ。

マーケティング主導では感動が薄いのだろう。そもそもクルマには夢が大切だと思う。夢って何だ、と言つたら定義は人それぞれだろうけど、少なくとも今の自分と等身大ではないはず。ドンピシャは夢じゃないよね。

マーケティング主導で家族構成とか年収とか生活スタイルとかをメーカーの人間から当てはめられ、あなたにピッタリなのはこれです、とやられて夢はあ

「メーカーの努力だけでなく、

ジャーナリストが時には職業を賭して伝え、

ユーザーが本質を見極められる

情報を提供すべきだと思おう」

それは「若者のクルマ離れ」をトヨタを筆頭にメーカーが心配するようになってきた。かえって良かったと思っている。なぜなら、それが変革の兆しだからだ。

これから登場するクルマに期待するのは、僕らが高校生頃、ホリデーオートを回し読みして、クルマを手に入れるとモチベーションし、大人って格好いいな羨ましいなと思ひ、早く大人になりたいと背伸びした要素だ。

と言っても僕は昔話をしたのではない。昔のクルマを懐かしむでもない。あの時あの時代に僕らがクルマに描いたワクワク感、そして人生へのドキドキ感、あのすばらしい感動を、すべての作る人、伝える人、使う人に、そして自分自身に呼び起こさせたいのだ。

多くの人たちの力で100回を迎えることができたけど、必ず終わる日はくる。その日まで僕は声を上げ続けたい。未来の歓喜へ！